
うきよに君と図書室で

相良 マミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うきよに君と図書室で

【Nコード】

N7672T

【作者名】

相良 マミ

【あらすじ】

高校二年生のある梅雨の日。放課後、図書室の日本文学の棚前に呼び出された僕は名前も知らない女の子から告白された――

そうじたかひろさんが主催されている短編企画「しずくとつむぐ」への参加作品です。

オレは梅雨がキライだ。

毎年必ずやって来るこの季節。もう毎日が憂鬱で仕方がない。一年の中でもっとも嫌いな季節と断言してもいい。

しとしと、じめじめ、ぬめぬめ、ぺとぺと。そしてさらに、蒸し暑い。とにかく不快。もんのすんげー不快。

いや、昔は好きだったんだ。梅雨の雨。

子供の頃は、紫陽花の葉っぱの上を這うカタツムリや、道路を渡ろうとしているらしいアマガエルを見つけては喜んだものだ。

夏ほど暑くはないし春ほど風もないから、中学の頃には雨でも平気で外に出て、友達と一緒にずぶ濡れの泥だらけになりながらサッカーやらバスケやらをした。もちろん、母親にはその後でたつぷりと怒られていたわけだが。

あの、雨の日に訪れていた、変な高揚感は一切何だったんだろう？

——そう思わずにはいられないほどに、今はそんな興奮が訪れることもなく。雨だれに侘び寂びのような風情を感じて涙を流し、四季折々で見せる顔の違う雨の日をいとをかしと言えるような、黒目黒髪の日本人らしい感覚は到底持ち得ない。

非常に残念だ。いや、別に残念でもないか。

オレが雨を嫌いな理由はいくつかある。

理由その一。暗いから。

雨雲の黒さがまずキライだ。どんよりとしやがって。白い雲ならわた飴と思ってやってもいいが。

だいたいあの黒さの元は何なんだ？ 中学のとき、雲は空気中の塵を核として水蒸気がウンヌンと習った気がするんだが。だとして

も、水蒸気は無色透明だろう。晴れているときの白さにだってなんか納得いかないのに、雨や雷の雲は白いどころか黒いつていうのはどう考えても変だろう？

もしかして、核になってる塵って光化学スモッグとかいうヤツか？　だとしたら、それが雨と一緒に降って来てるってコトか？　考えただけでも気持ち悪い。

次。理由その二。癖毛が言うことを聞かなくなるから。

高校二年にもなれば、男であっても、さすがに身なりに気を配るようになる。毎朝、洗面所で寝癖を直したり、出かける前に全身鏡でチェックするのは当たり前だ。女の子の視線も気になるしな。

だが、オレの頭髪にはかなりの癖がある。この毛質は完全に父親譲りだ。晴れている日でさえ、寝癖を直すのに相当苦勞するのに、雨の日ともなるともう地獄だ。タオルとドライヤーとヘアブラシとワックスを使い、なんとか凌いでいるという状態。ひどいときは、直すのに三十分以上の時間を要する。

まったく、ただでさえ朝は一分でも長く眠っていたいと言つのに理由その三。最後にして最大の理由。自転車通学の妨げになるから。

オレの通う高校は、自宅から五キロくらい離れている。徒歩で通うには遠すぎるし、公共交通機関を使おうにもこの街にはバスしか通っていない。

もちろんバスでも通えないことはない。が、高校と自宅との位置関係とバスの路線が上手く噛み合わないのだ。どうしてもバスで通学するとなると、いったん学校とは違う方向にある駅に向かうバスに乗り、駅で高校行きのものに乗り換える必要がある。

そんな面倒くさいコトやってられるか、どあほう。さらに、所要時間は渋滞を考慮しなかったとしても、一時間弱かかるしな。通勤ラッシュのことを踏まえて考えると、一時間半はかかるはずだ。

その点、自転車だと、遠回りをせずに済むし、二十分もあれば到着する。実に合理的だ。

そんなわけで、雨の日でも、オレは傘を差しつつ自転車で通うことにしている。どうしても、傘じゃ凌げんってときだけ雨合羽を着る。どっちにしても、視界が狭まるし、不快なことに変わりはない。

前置きが長くなってしまったが、まあつまり、今はオレが大ッ嫌いな梅雨の真っ只中という季節なわけで。

そして小降りだった今朝とは違い、本日最後の授業が終わったばかりのこの時間、窓の外の天気は本格的な土砂降りになっていたというわけだ。

オレがますます梅雨という季節を嫌ったとしても、誰が責められようか。

「おい、日直。悪いが、これ、図書室に返しておいてくれ」

終業のベルが鳴り挨拶をした直後、先生は、教卓の上に重そうな本をどんと置いた。そして、生徒たちの方を見ることもなく、自分の教科書と授業用ノート、出席簿だけを抱えて教室を立ち去って行った。

「はいはい、わかりましたよっと……」

わざわざそんなに大きな音を出して重さを強調しなくたっていいじゃないか。オレはそう思いながら立ち上がった。まことに喜ばしいことに、今日の日直はオレだったりする。マジで、嬉しくて涙が出そうだけ。

クラスメイトたちが荷物をまとめて教室を出て行くこととする中、オレは一人教卓に寄る。

教卓の上に置かれていたのは、写真資料集だった。

さっきの授業は世界史だったはずだ。『はずだ』としか言えないのは、記憶にないからだ。

睡眠学習に近い状態だったオレは、この資料集を、授業中のいつどのタイミングで何のために使ったのか、まったく覚えていない。

先生の話すらまともに覚えていないのだから当たり前だ。

改めてその冊子を見る。見るからに重そうなそのハードカバーの本は、A3よりも一回りほど大きいサイズで正方形、厚さは十センチほどあった。随分と使い込まれているのか、それともただ単に古いものだからなのか、布が貼られた立派だったはずの表紙は既にぼろぼろ、せつかくの箔押しタイトルも無残に剥げ上がり、中の紙も酸化して黄ばんでいる。背表紙も崩壊寸前で、留めるために貼られたらしいセロファンテープが、ただの残骸と成り果ててぱりぱりになっていた。ちよつと触っただけで剥がれてしまいそうだ。

これは、持ち運ぶのに結構な神経を使いそうだな……。先生もそれが面倒臭くて生徒に任せることにしたに違いない。

文句は山ほどあるが、言うべき相手が見つからない。それに、オレが本日の日直だというのはクラス全員が知っていることで、先生が『日直』を指名したことも周知の事実だ。一瞬だけ何か理由をつけてサボろうかとも考えたが、残念なことにオレの頭では完璧な言い逃れのできる口実が思い浮かばなかった。

まあいい。どちらにせよ外は大雨だ。ずぶ濡れになるとわかりきっているから、今すぐ帰路に着くのも気が進まない。図書室にこれを運んでる間に、ちよつとは雨脚が弱くなるかもしれない。

オレは両腕を使ってその本を抱え上げると、教室を出て図書室へと向かった。

● 頁 1 ● (後書き)

——あれ？ 終わらなかった……？

放課後の図書室は人気ひとけがない。いや、図書室に人気ひとけがないのは別に放課後だけじゃなくて、いつも、なのだが。

公立とはいえ、一応、進学を希望している人間ばかりが揃っているのだから、自主学習しているヤツが少しくらいいてもよさそうなものなんだが、生憎というか何というか、学校の近くに進学予備校が三件も軒を構えているものだから、エアコンの効いた過ごしやすい自習室を求めている生徒としては、高校の図書室などというエアコンもなくプライバシーも守られていないような劣悪な環境に身を置きたくないのである。

そんなわけで、閑古鳥が鳴くラーメン屋並に常に閑散としている図書室なのだが、それはやはり今日も同じで、なんとか本の原形を崩さずに図書室に辿り着いたオレが見たのは、見える場所には誰も生徒のいない広い部屋と、それでも律儀に出入口近くに設けられた受付席に座りつつ何かの本を読んでいる女性司書の姿だけだった。

昨年度まではどこぞのジイさん（もちろんれっきとした図書司書なのだが）がこの図書室を根城に一日中昼寝していたが、どうも定年退職になったか異動になったかしたようで、今年度からはこの若くて色香漂う女性司書に交代している。

図書室という場所が、この学校の生徒においてあまり重要な位置付けにないためか、この新任の図書司書存在を知る者は学校内には未だ少ない。オレもつい半月ほど前に知ったばかりだ。

あ、念のため言うておくが、彼女のことを知ったのはまったくの偶然だ。ヨコシマな心は何もない。

しかし、もし彼女のことを知っている生徒が増えたら、この図書室は間違いなく男子生徒の溜まり場になるはずだ。目の前に美女が

いるという状況で「綺麗なお姉さんは好きですか？」そう聞かれて、「ノー」と答える男子生徒などいるわけがない。要するに、端的に言つと、この新しい図書司書は男なら十中八九が振り返ると言つても過言ではないほど別嬪さんなのだ。

多分、大学を卒業したての新人なんだろう。オレから見ても若かつた。

黒いストレートの髪は顎のラインで前下がりのボブに切り揃えられていて、化粧も薄め。それが何かを請うような甘えを含んだ彼女の目尻の垂れた瞳をより一層際立たせていて、まことに好ましい。洋服は私服。甘過ぎない、かつクール過ぎない綺麗めのトップスに、タイトスカートを合わせていることが多い。一応、生徒の年頃を気にしているのか、肌色ではなく常に黒いストッキングを履いているのだが、その絶妙な透け感のあるナイロン素材に包まれた曲線美がまた堪らなくいい。

オレが受付の方へと歩んでいくと、彼女はオレの存在に気が付いて顔を上げた。そして、少し驚いたように目を見開く。彼女はオレが目の前に来るのを待ってから、小首を傾げつつ「どうしたの？」と小鳥のような声で尋ねて来た。

「先生に頼まれて、資料を返しに来たんですけど……」

「あら、そうだったのね。ご苦労様」

彼女は顔を綻ばせた。咲きかけの白百合の花を思わせる。うん、やはりいい。綺麗なお姉さんは大好きだ。

オレが受付の机の上に持ってきた本を置くと、彼女は手際よく返却の処理を始めた。

彼女の首が振れるたびに、香水なのかシャンプーの香りなのか、はたまたフェロモンなのか、よくはわからないが、とにかく男心をくすぐる心地いい香りがふわりと漂う。

返却手続きなんて数分と経たずに済んでしまうだろうが、あと三十分はこのままでもいいとオレは思った。

それにしても静かだ。

なんだか息苦しく感じてしまいうくらいに。

そういえば今、多分この図書室にはオレと彼女の二人しかないわけ。おまけに図書室は教室のある棟とは別の建屋にあるから、一番近い教室までであっても十メートルほど離れているわけで。

えっと、つまりだ。

つまり、この図書室は今、鍵は閉まっていないものの密室に近い状態になっているということであり、そしてそしてさらに言えば、その密室（に近い状態）にオレと彼女とはたった二人きりにいる――ということになる。

ふと思いついてしまったこの事実、オレの背中を何かが走った気がした。

いやいやいやいや。待て待て、早まるな、オレ。いったい何を考えているんだ。

オレは、動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獣亜綱正獣下綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種に属する『ヒト』という唯一無二の種だ。地球上でもっとも理性的な生物（のはず）だ。盛りのついた猫じゃあるまいし、例えば目の前にいるのがどんな美女だろうが、ここが密室だろうが、人生早まっちゃいけない。

「はい、ありがとう。返却処理は完了ね」

彼女の声が聞こえてきて、オレは我に返った。妄想の世界にトリップしていたせいで反応が遅れてしまったオレを、ぼおっとしていたのだろうと勘違いしたらしく、彼女がくすりと笑う。オレはぼつが悪くて少し眉間に皺を寄せた。

「本はここに置いておいてくれていいわよ。私が本棚に戻しておくから」

彼女が言った。

え、いいのかそれで？ 結構重かったぞ、この本。

オレは彼女のか細い腕を見る。確かに、彼女にも運べないことはないだろうけど、あの綺麗な腕にこのぼろぼろの本を持たせるのが猛烈に悪いことのように思えてきて、気が付くとオレは彼女にこう言っていた。

「あ、いいですよ。場所教えてくれたら、オレが運びます」

彼女は驚いたように目を見開き、いったんは遠慮した。それでもオレが再度申し出ると「それなら、お願いしようかな」とはにかみつつも笑顔になる。

開花した白百合のような笑顔。

その笑顔が見たくて、言ってるんです。

——とは言えない自分が少しだけ悲しい。

彼女は立ち上がり、オレに本棚の場所を腕で指し示した。

「あの右から二つ目に並んでいる本棚の八列目よ。この資料集と同じシリーズが一番下の段に並んでいるから、巻数を見て入れてくれると助かるわ。多分、空いているところに入れば、それで合っているとと思うんだけど」

「はい」

オレはもう一度写真資料集を両腕で抱えた。その重みを身に沁みて感じつつ、やはり彼女に任せなくてよかったと思った。

• 頁 2 • (後書き)

すみません、まだ続きます……orz

美人司書に教えてもらった書棚は、読書スペースを越えてさらに向こうに並んでいた。

本棚は、ちょうど受付席と並行になるように並べられているから、本棚と本棚の間に入ってしまうと、受付席からはまったく見えない死角となる。

オレは椅子にぶつからないように気を付けつつ読書スペースを抜けた。本棚の並ぶエリアに差し掛かる。

一、二、三、四……

一列ずつ数えながら奥へと進む。そうしないと、いや、そうしていたとしても、今自分が何列目にいるのかわからなくなりそうだ。それにしても、八列目って、相当奥だぞ。この図書室、結構広かったんだな。

それに、現在地をロストしないように意識しつつ、本が崩壊しないように気を付けねばならないというのは、意外と難しい。

それでもようやく八列目の本棚に辿り着き、オレはこの写真資料集を納める場所を探すべく、俯きながら本棚と本棚の間に入った。

意外なまでにといいほどでもないが、本を入れるべき場所はすぐに見つかった。彼女の言うとおり、八列目の本棚の一番下の段にはオレが今運んでいる本と同様のぼろぼろの態をした資料集の背表紙が並んでいたわけなのだが、その列に入って三步と行かないところに、オレはちょうど一冊分くらいの空きスペースを見つけたのだ。た。

ここだな。

一応、持っている本と書棚にある本との巻数を確認する。うむ、合ってる。

オレはそこにしゃがみ込み、慎重に、運んできた写真資料集をそのスペースに当てがった。ぎりぎりの幅だ。このまま押し込むのはまずい。

オレは持ってきた本を自分の脚に凭せ掛け、腹筋に力を入れつつスペースの左右の本をそれぞれ左と右に押し詰めた。ちよつとだけ、先程よりもスペースに余裕ができる。それを確認してから、それでも未だきつい感じの空きスペースに、持ってきた写真資料集を押し込んだ。

ゆつくりと、確実に、押し込んでいく。やがて、背表紙が他のシリーズと同じ位置になった。
ふう。

手を本から離し、しゃがんだままため息をついたとき、ガタンという音が頭上から聞こえてきた。驚いて見上げる。

同じ本棚の一メートルほど奥に、一人の女子生徒がいた。高さ六十センチくらいの脚立に乗って、それでも届くか届かないかくらいの高さの段にある本を取り出そうとしていたらしい。背伸びして手を上に伸ばしたまま、固まったようにオレの方を凝視している。

雰囲気からして、随分前からそこにいたらしい。全然気付かなかった。

確かにオレはずっと下を向いていたけど、気付かなかった理由は多分それだけじゃない。それくらいに、その女子生徒は大人しそうに見えた。

校内で何度か見かけたことのある少女だった。可愛なっと思ったから覚えてる。オレの記憶が正しければ、同じ学年の生徒のはずだ。でも、名前は知らない。

ピンク色のクリアなセルフレームの眼鏡と二本のお下げ髪。そのコンビが、非の打ちどころがないほどに完璧なまでの調和を見せ、スレンダーな身体つきなのに出るところは丸く出っ張っているという、実に男心くすぐるプロポーションだ。白いシャツにベージュのベスト、そしてチェック柄の布地で作られた膝上丈のプリーツスカ

ートという制服姿は、清々しいまでに校則に則っていて、彼女に似合っていた。

しかし特筆すべきは、何と言っても、その絶対領域の眩まはさだろう。スカートの裾から膝下丈の紺色のニーソックスまでの、その不可侵な柔肌が、堪らない魅力と絶大な破壊力を持つて、オレの視覚に直接攻撃を仕掛けて来る。オレの方が目線が低いせいで、通常よりも見える面積が明らかに広い。その面積に比例して攻撃力が倍増されているのは明らかなわけで。

美人司書に、美少女に、密室のごとき図書室。

嗚呼、今まで毛嫌いしていたが、梅雨もなかなかいいもんだ。

そうオレが思ってしまったのを責めるような、無粋なヤツがいな
いことを願いたい。

まったく動かないオレの視線がどこに向けられているのか気付いたらしく、少女は顔を真っ赤に染めると手を本から外してスカートの裾に当てた。そしてスカートを抑えたまま、ゆっくりと脚立を降りた。

さすがにオレも立ち上がる。

「えっと……ごめん」とりあえず謝った。「いるの、気付かなくて」少女はオレの方に身体を向けたものの、俯いてしまって顔をまともに見ようとしない。手を胸の前でもじもじと擦り合わせ、身を縮めて立ち竦んでいる。

「ほんと、ごめん」

オレがもう一度言つと、少女は、小さく、小さく、本当に目を凝らしていないとわからないほど小さく、頷いた。

いい物を見せてもらったけど、後悔はしてないけど、オレに対する印象はサイアクだよな。

用は済んだ。不可抗力だったとはいえ謝罪もした。だから、いつまでもこうしてここに突っ立っていても仕方がない。オレは踵を返

して立ち去ろうとした。

——のに、腕に抵抗を感じて立ち止まる。

振り返ると、先ほどのお下げ美少女が、オレの腕を捕まえていた。その顔はやっぱり真っ赤で、上目遣いでオレの方を見る瞳は眼鏡のガラス越しでも潤んでいるのがわかった。オレは、その成熟し切っていない不完全な妖艶さに、息を呑んだ。

彼女はオレと目が合うとパツと視線を逸らした。そして、オレの腕を掴んだまま、オレに話しかけもせず、オレの方を見ようとせず、迷路のような書棚の奥の方へとオレを引っ張る。

仕方なく、オレはそれについて行くように脚を動かした。

しばらく歩いた後、ようやく彼女が足を止めたのは、図書室の奥にある日本文学の書棚の前。

そこまで来て、彼女はオレの腕を放し、またオレと向かい合って俯いた。

そのまま再び両手を胸の前に当てて、もじもじと身体を動かす。たまに窺うように上目遣いでオレの方を見、目が合うとパツと離す。そのループが、一定の間隔で何度も何度も繰り返される。

そろそろ、それも十回目だ。その間オレはずっと阿呆みたいに突っ立ったまま。

……というかだ。この状況下で、オレに、どうしろと？

話しかけるべきか？ 何のためにオレをここまで引っ張ってきたのか、声をかけて聞いてみるべきか？

そのとき、ふと思った。これはもしか、あの日本最大手の某掲示板サイトでよく言われている『フラグ』とか言うヤツか？ そう考えるのは、さすがに自惚れというか、時期尚早だろうか。

いやでも、この目の前にいる美少女は、明らかに照れている。オレに対して。

であれば、だ。これは待つのがベストだろう。彼女が話しかけてくれるまで。

オレは勝手に結論付けて、彼女が口を開くのを待った。

彼女は相変わらず落ち着きなくうつろと視線を彷徨わせ、ときたま口を開きかけてはまた閉じる、という一連の動作を繰り返している。

そしてついに、赤い顔を逸らせたまま、声を発した。

「あ、あの……」

「ん？ 何？」

オレは期待に胸を熱気球のように膨らませながらも、クールさを忘れないよう勤めて応える。

彼女は、そんなオレに視線を合わせないようにしながら、右腕を少しだけ挙げ、蚊の鳴くような声で言った。

「社会の窓、開いてる」

——え？

身体中の血が下がっていくのに比例して、オレの視線も下がる。その先、ちょうど、彼女が挙げた手の指の延長線上に映ったのは、オレの履くチェック柄のパンツのほぼ中央から覗く、制服のシャツ……。

マジかつ！

慌ててファスナーを引つ張り上げる。その音に重なるようにして、彼女の走り去る足音が聞こえて来た……。

ぐっ……。

やっぱり梅雨なんて、大ッ嫌いだ！

● 頁 3 ● (後書き)

ここまでお読みくださいまして、ありがとうございました。

雨の日の告白……になつてないですかね？ ホラ、『告白』って何も恋心を言うただけに使う単語じゃないじゃないですか。胸に秘めていたことを言葉にして外に出すことを言うじゃないですか。

——え、やっぱりだめ？

まあ、それはさておきまして。

久しぶりのライトノベル風味の文体は、書いていてとっても楽しかったです。ストーリーも複雑と言うわけじゃないので、遅筆な私でも割とサクサク進みました。

それにしても、2500文字ほどの短編企画のはずが、いつの間にやら延びに延びて、その約3倍、連載3回分となつてしまいました。そうじさん、ホントすみません……。

企画に早々たる参加メンバーが揃う中、つついこメデイに走つてしまったこの物語が、ぽつねんと哀愁を帯びて浮いていないことを祈ります。

あ、そうそう。「社会の窓」って言葉、わからない方がいらつしやったらすみません。

要するに、ズボンの前ファスナーです。私が子供の頃は「社会の窓」って表現をしていたんですけど、もしかしたら今はそんな言い方しないかもしれませんね。

それと、もう一つ。タイトルにある「うきよ」は「浮世」(憂き世)と「雨季」とに掛けております。

改めて調べてみたら、『浮世』っていういろんな意味があるんですよ

ね。物語にもその言葉が持ついろいろな雰囲気醸し出したくなって思って書きました。なーんとなーく、感じ取っていただけたなら、作者がとっても喜びます。

最後にもう一度お礼をば。

最後までお読みくださいますと、本当にありがとうございます。感想や評価などいただけると、とっても嬉しく思います。

●短編企画『しずくとつむぐ』に参加しているほかの作品は、下記よりどうぞ♪

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/46398/blogkey/194314/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7672t/>

うきよに君と図書室で

2011年9月3日03時27分発行